2025年1月5日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

イエス様に引っぱられて行く

［マタイによる福音書3章7～17節］

ヨハネは、ファリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、バプテスマ（洗礼）を受けに来たのを見て、こう言った。「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。言っておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。わたしは、悔い改めに導くために、あなたたちに水でバプテスマを授けているが、わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちにバプテスマをお授けになる。そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」そのとき、イエスが、ガリラヤからヨルダン川のヨハネのところへ来られた。彼からバプテスマを受けるためである。ところが、ヨハネは、それを思いとどまらせようとして言った。「わたしこそ、あなたからバプテスマを受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか。」しかし、イエスはお答えになった。「今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです。」そこで、ヨハネはイエスの言われるとおりにした。イエスはバプテスマを受けると、すぐ水の中から上がられた。そのとき、天がイエスに向かって開いた。イエスは、神の霊が鳩のように御自分の上に降って来るのを御覧になった。そのとき、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と言う声が、天から聞こえた。

[1]　ヨハネの「バプテスマ」と、それに続くもの

　新しい年、2025年が明けました。改めておけましておめでとうございます！

皆さんは、お正月は少しゆっくりと過ごせましたでしょうか？そうであれば幸いだなと思いますが、そうでなかった方もいるかもしれませんね。でも、一年と言っても一日一日の積み重ねですから、その毎日の生活にイエス様が目を留め、恵みと御手の中で導いて下さいますようにお祈りしています。また、この小さき者のためにもお祈り頂ければ幸いです。本年もどうぞよろしくお願い致します。

今年最初に与えられている聖書の箇所は、イエス・キリストが、その公のご生涯の初めに、バプテスマのヨハネからバプテスマ（浸礼・洗礼）をお受けになったという箇所です。

バプテスマ（浸礼・洗礼）って、ある意味、不思議な儀式ですよね。今、「儀式」と言いましたけれども、一般的にはどこか重たいイメージがあるかなと思います。もちろん、バプテスマは決して軽いことではないと思います。しかし、もしかしたらこのことは単にクリスチャンになるための‟通過儀礼”のように思っている所がないだろうか？と思います。でも本来は、もっとイエス様にある福音の喜びというものが込められているものなのです。そしてそのようなものに、今日の聖書の出来事から、バプテスマの意味が新しくなったのだと思います。

イエス・キリストの先駆者であるバプテスマのヨハネが、ヨルダン川で行っていたバプテスマというものは、神様への悔い改めの思いを示すものだったと言って良いと思います。神様への悔い改めを、身をもって現わす訳です。当時、神様の「審判の時・裁きの日」が近い内にやってくる、それまでに心の姿勢を神に向けて整える備えをする、そのヨハネのメッセージが人々を動かしていたのでしょう、続々とヨルダン川にやって来て、その川に全身を浸し、また水からあがることによって、自分を、特に罪を洗って頂くことを多くの者たちが希望したのです。これはある意味、日本古来の「みそぎ（禊）」というのとよく似ているかもしれません。**「**みそぎ」というのは、罪や穢れを落とし、自らを清らかにすることを目的とした、神道における水浴行為と言われています。それはいわゆる「お祓い（はらい）」ということとも近いです。罪や穢れを祓って頂くことによって、呪いや審きから免（まぬか）れる、という考えから行われます。

バプテスマのヨハネは、3章11節で「わたしは、悔い改めに導くために、あなたたちに水でバプテスマを授けているが、わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない」と語りました。ヨハネは、自分が行っていたバプテスマ運動が絶対だとは思っていなかったのですね。しかしそれでも、5～6節にも記されているように、「エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた」のです。当時終末が近いという危機感が強く、多くの人々が自らを振り返り、内省的になっていたのでしょう、一種の宗教的リバイヴァルのようなことが起こっていたようです。多くの者が、このカリスマ的なヨハネの許に来て、罪を告白し、川の中に一度沈められるという行為を通して罪を清めて頂き、終りの日に備える準備としたのです。極めて真面目な、人の心の動きです。悪いことではありませんね。しかし、ヨハネ自身はバプテスマを授けながら、これで全てOKとは思っていませんでした。‟人よ、これでもう大丈夫などと思うな、私はあなた方に悔い改めのバプテスマを与えるが、あなた方を本当に清くするのは、このような水の力ではないし、また私でもない”と、そう語っているのではないでしょうか。「わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちにバプテスマをお授けになる」とヨハネは言いました。面白いですね。人々に授けながら、私じゃないのだ、私の後に来る方、このお方こそ、表面的な水ではなくて、神様が直接働かれる聖霊と火（これも聖霊の別表現でしょう）によってあなた方を御国に繋げるのだ、悔い改めに相応しい実を結ばせてくれるのは、私の後に来るお方なのだ、と言っています。ヨハネは自分自身の働きをわきまえていました。

[2] あなたも私と共に水の中に入ろう

 13節からイエス様が登場しますが、「そのとき」と書かれています。旧約聖書の時代が終わり、それこそ新しい年が始まった如く、神の独り子イエス・キリストのご支配の時代が始まる重要な「そのとき」 が訪れました。

ここで何が起こったのでしょうか？―神の子イエス・キリストが、一預言者のヨハネからバプテスマを受けられたのです。しかも自ら進み出て！ヨハネは怯（ひる）み、「わたしこそあなたから受けるべきなのに」と言いました。すると主は15節で、「今は止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、われわれにふさわしいことです」とおっしゃいました。「正しいこと」。これは、‟神様の御心にとって”正しいことという意味です。これが神様の御心なのだから、わたしを水の中に沈めて欲しい、と言われたのです。ヨハネはイエスの言われたとおりにしました。厳かな時間だったと思います。

なぜ神の子イエスが、「悔い改めのバプテスマ」を受けられたのか。主は悔い改めるべきものを抱えていたのでしょうか？いいえ、主は悔い改めなければならない私たちと連帯し、一体になられたのだと思います。それが、神様の目に「正しいこと」だったのです。ここに、神様の「祈り」がありました。もはや幼子ではない、大人になった主イエスの「祈り」がありました。マタイ福音書の他の箇所に、「（イエスは）群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた」（9:36）とありますが、そこにイエス様の祈りが集約されているように思えます。主イエス様は、私たちを見離すなどということは出来ないのです。ダメな私たち、罪だらけの私たちを深く憐れんでいて下さっています。

バプテスマ。―それは、「浸す」という動詞から来ています。水の中に浸す。もっと言うと、水の中で一度死ぬのですね。私たちは水の中では生きられません。水とは、ただけがれを清めるということだけでなく、その中に沈められて死ぬのです。主ご自身が水の中に沈められたということは、死ぬべき私たちと連帯して、主ご自身もそこで死を味わう、ということに繋がります。

ある人が「もしも私が地獄におちたとして、しかしそこにイエスがいたら、そこはもはや地獄ではなく天国だ」と言いました。面白い言い方ですが、これは福音的真理を突いているように思います。主イエス・キリストが水の中に沈められたということは、十字架の上で私たちの罪の生贄となって下さった、ということと一つです。そんなことをなさる必要は全くないお方が、水の中に入り込んで下さった。十字架では、死の淵の底に沈んで下さった。それは、彷徨う羊のように方向を見失っている私たちを「さあ、こっちへ来い！」と力強い手で引っぱって行って下さっているということだと思います。だから、主は敢えてヨハネからバプテスマを受けられました。さあ、あなたも私と共に水の中に入ろうと。でも、入りっ放しではありません。十字架の後に復活があるように、水の中からも潜り抜けます。その時、聖霊が降り、天から声がしたと書いてあります。17節。「これは私の愛する子。わたしの心に適う者」。あなたは確かに私の愛する子だ。イエス様に告げられたこの愛の言葉は、イエス様に引っぱって頂いて水の中に連れて行かれ、イエス様の十字架と復活の恵みに与った私たち一人ひとりにも、神様は宣言して下さっている言葉だと私は思います。「これは私の愛する子。わたしの心に適う者」。

私たちは所謂「みそぎ」をする必要はないのです。私たちが信仰告白をし、バプテスマを授けられた時から、神様が私たちを手放すなどということはあり得ないのです！イエス様はどんな時にも共にいます！審きの日にも共にいます！そして、主は今日も私たちの手を取り、引っ張って行って下さいます。‟さあ、私と共に歩いて行こう、と。あなたがすることは、ただ私から離れないようにすること、それだけだよ”と。主は、この後行われる「主の晩餐」の中にも確かにご臨在下さいます。そのようにして生ける主として、絶えず語りかけていて下さいます。フラフラする私たちの手を、引っ張って行って下さいます。お祈り致しましょう。

主なる神様、新しい年の最初の礼拝をご一緒に守ることが出来て感謝致します。あなたは、この公同の礼拝の中に、聖霊を通して共にいて下さいます。そして語りかけ、私たちの弱い手を引っ張って下さいます。不安な所から御手の中へ、また、悪魔の手から私たちを引き離し、緑の牧場（まきば）へと連れて行って下さいます。一緒に復活の光の中へ共に進もうと、引っぱって行って下さいます。ありがとうございます。この年もあなたについて行きたいと思います。どうぞ憐み、守り、また踏みしめながら前に進むべき力をもお与え下さい。私たちの教会の交わりが、いつも主のみを仰ぎ、支え合いながら進むことが出来ますように。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。